

生命

喪中のハガキ

毎年十二月になると、郵便受けに白い喪中のハガキが入るようになる。それは知人の親族の場合が多いが、中には知人その人であったり同級生であったりする。一時代前ならば、古希を過ぎての訃報は驚くべきことでもないのだが、現代の長寿社会に生きていると何処までが天寿なのかわからなくなる。

私が驚き最も哀しいのは、かつての教え子の逝去である。教員というものは何百人、何千人と若い人々の顔に接していても、不思議と顔も名前も覚えているものである。私はこの年齢に至るまでに多くの人の死に立会い、別離のつらさを味わってきた。祖父母、両親、兄弟、知人等々、それらは言うまでもなく、すべて同じ比重の命との別離であり、寂しさに軽重のあろうはずはない。だが特に、近親者を除いて、肝胆相照らす朋ともとの別れには辛いものがあつた。

私は定時制夜間部に学び、同級生にM君とW君という気の合う友だちがいた。三人はいつも自分たちの境遇も考えずに、雲を掴むような大学進学のを夢を語りあつた。M君の勤めは郡山市の私の家から十二キロも離れた安積永盛当時は国鉄安積永盛駅の南の外れにあった。仕事は歯科技工士見習いだった。我々は話に夢中になり、彼

は時々最終列車に乗り遅れた。その折、彼は私の家に泊まった。それがいつの間にか定着化し、彼は冬期間、私の母が二人の分として炬燵で温めておいてくれた、どんぶり飯を分け合って食べて寝た。

そして、一つ布団に包^{くる}まって眠った。しかし、彼は毎朝私には到底真似の出来ないことをやってのけた。早朝六時に起きると寢床をそつと抜け出し、十二キロの道を歩いて出勤したのである。彼の言によると「冬の田んぼ道は凍っていてその上を直線で歩けるから楽しんだ」と軽く云って笑った。仕事も学校もけっして休むことはなかった。その勤勉さが認められ、勤め先の歯科医師の養子となり歯科大学に合格した。

W君は彼を追うように経済学部に入學、私は文学部に籍を置くことになった。三人の友情は都会暮らしでも変わることはなかった。

ところが驚いたことに、M君はいつも高校時代の詰襟服を着ていたのである。詰襟の袖は擦り切れ、黒地の生地色は紫色に変色し、とても医学生とは見えないみすばらしきであった。W君と私は相談し、僅かのお金を出し合って質流れ店から安物の背広の上着と中古の腕時計を買い、ある日さり気なく手渡した。以来、我々はそのことをすっかり忘れていたが、十数年後、彼はその上着を抱いてその夜泣

いたと笑いながら語ったことがあった。

彼はその後、子飼いのような養子縁組を金銭で解消することとし、歯科医師の資格を得るや岩手県は八幡平の松尾銅山に歯科医師として入山した。彼は十年間縛られていた縄を解き放ち自由を手に入れたのである。松尾鉦山は当時三万の人口を抱え賑わっていた。しかし、冬季の半年は雪のため陸の孤島となった。医師と名の付く資格者は彼ひとりだった。近隣の人たちはそんなことにはお構いなく、内科の診察を必要とする患者までが雪の扉を叩いた。彼は休む暇もなく診療にあたったが、歯科以外はお金を取らなかったという。これが返って無料医師という評判になり多忙を極めた。彼が命を縮めたのはこのときの無理があったのではないかと今に思う。彼は誰よりも苦難の道を辿ったはずなのに、「自分が生きるのは他人のため」を口癖とし、笑顔を絶やさない人だった。彼はこの地で結婚し、雪山に入口だけがある玄関前で撮った写真を送ってくれた。

幸か不幸か間もなく松尾鉦山は閉山となり。彼は盛岡市の中心地、内丸に転居したが、彼の人柄と腕前は繁盛をもたらした。若い医師も雇い自分は博士号を取得し、自他共に絶好調と見えたとき、診療中に倒れたのである。何度か見舞いに行ったが、病名は前頭葉癌で

摘出不可能の箇所患部があつた。一応落ち着いたかに見えた病は、二年後、車の運転も可能にしていた。その彼が、あるとき一人で盛岡市から郡山市まで突然車を運転してやってきた。普段と変わらないう様子は安心を何よりの土産としたが、彼はこの時、自分たちの新婚旅行の記念品だといって、遠慮する私にはカフスセット、家内にはネックレスを置き一泊して帰って行つた。これが彼との永訣になるだろうなどとはまったく考えてもみなかった。彼は遺品を置いためにだけ私の家を訪れたとしか考えられない。彼は多くの人々に惜しまれ感謝されながら四十三歳の若さで岩手の土になつたのである。人の死は誰のものであつても限りなく寂しく哀しい出来事である。しかし、人間にとってこれが避け難いものであるならば、人の死は情念や情緒を超えて、あとに残つた人々に「生」を考えさせてくれる機会になるに違いない。さらに、生と死は表裏であり、それ故に人の死は、人々に「生の思索」を生産してくれることにもなる。マルチン・ルターの言葉に次のようなものがある。「死は人生の終末ではない。生涯の完成である・・・」この言葉の解釈は難しい。死は生後間もなくから百を超えるまでさまざまである。

翻つて考えてみると、その人の真の死とはすべての人々の記憶か

ら消え去った時に訪れるような気がしてならない。今年も喪中のハガキを見るとM君のあの笑顔が浮かんでくるからである。

遠からず、我々もこの世に喪中のハガキを残してあなた方のところへ逝くだろう。その時が来たら、先輩に敬意を表して心を込めて手を握るから、皺クシヤになった私の手を見て、「老人くさくなったなあ」なんて云わないでほしい。私は言おう！あなたの遺志を継いで一所懸命に生きた「この皺が仮の世での勲章なのだよ」と・・・。